

◆日根野聖子 選

「八木健のCATV俳句」の番組内で、御意見番的な存在としてレギュラー出演されているのが小西昭夫先生。小西先生は、愛媛新聞の俳壇選者であり、「子規新報」の編集長としてもご活躍です。小西先生の朗読作品「チンピラ」シリーズ、待望の第二弾をご紹介致します。

「チンピラⅡ」 小西昭夫

春はあけぼのそろそろ帰らねばならぬ

かつて、日本には通い婚の時代がありました。その時代の朝であります。ひよっとしたら、現在もあるかもしれません。

太初から浮かんでおるかあめんぼう

太初とは天地の開き始めたころのことです。その響きが好きであります。

切れ味の良き内股のすずしさよ

ぼくは柔道の技の内股のつもりで作ったのですが、句会ではそうは読まれませんでした。

首筋のほくろがきれいかき氷

主役はかき氷だったはずなのですが。

土曜日のゴキブリ日曜日のあいつ

「あいつ」とはどんなヤツなのでしょう。

朝食の梅干の種まだ口に

この酸味が捨てがたいのです。

青田又青田雨雨雨青田

漢字だけの句ですが、自分では好きな句です。

うなぎの日くるぞ結婚記念日も

「うなぎの日」は土用の丑の日であります。去年は¹²月二十四日でした。七月二十四日は、ぼくの結婚記念日であります。また、芥川龍之介の命日でもあります。今年の夏の土用の丑の日は七月三十日であります。事実以上におもしろくなった句であります。

乳牛と乳牛並ぶ涼しさよ

当たり前といえば当たり前なのですが。

鮎食いに行く山越えて山越えて

日本の川にこの魚がいることは幸せです。

蟻螂が行く舗装路のど真ん中

ぼくはちゃんと右側通行を守っています。

大きくしゃみして強かに舌をかむ

噛み切ることはありませんが、結構痛いのです。

酒を買い大根を買い妻の留守

果して、これは自由なのでしょうか、不自由なの
でしょうか。

不貞寝して初夢は見ておらぬなり

べつに不貞寝したからではないでしょうが。

めくるもの坊主スカート初暦

男の方には共感していただけるかと。

反省は途中でやめるお正月

だから、ぼくは駄目なんです。

掃除機は元気に仕事始めかな

ぼくはそうではないのですが。

白梅の雄蕊鼻毛のごとくなり

本当にそう見えるのです。

四谷赤坂六本木ちよろちよろ流れる春の水

寅さんの啖呵売を思い出してください。「四谷赤坂六
本木、ちよろちよろ流れるお茶の水、粹な姉ちゃん
…」。これを格調高い俳句にしてみました。

伊予柑をいかに傷つけずにむくか

これがなかなか難しいのです。

恋人と見てる地獄の窯の蓋

怖い句だと思うのですが、「地獄の窯の蓋」は植物です。雑草ですが、青い可憐な花を咲かせます。

龍天に昇る仕度をしておるか

何にでも準備は必要です。

腋汗をかいて坂道上りけり

ぼくはNHKの有働由美子アナウンサーのファンであります。結論でございます。

今もまだチンピラのぼく花は葉に

◆金澤健 選

今回は、自然詠滑稽句を、今少しつつこんで見たいと思います。自然詠滑稽句は、二つのタイプに分けられると考えます。即ち、“自然に人間を重ね合わせて詠む。そのことが、滑稽味を醸し出す”タイプと、もう一つは“自然の情景をありのまま詠み、それ自体が笑いを誘う”タイプです。後者に関しては、花鳥諷詠を本分とする伝統派俳人の方の句に佳句が多いと思われます。例えば、

ひた急ぐ犬に会ひけり木の芽道	中村草田男
炎天より僧ひとり乗り岐阜羽島	森 澄雄
マンホール底より声す秋の暮	加藤楸邨
よろよろと竿がのぼりて柿挟む	高浜虚子
水を釣って帰る寒鮒釣一人	水田耕衣

(いずれも「おぼえておきたい季節のことば 春夏秋冬新年」草間時彦より)

上記の句からみてとれる点、いくつかあると思います。作者は、見たままの情景をそのまま詠んだと思われます。決して、滑稽句を作ろうとしたとは思え

ません。詠まれている情景が、えも言われぬ、なんとはなしに笑みがこぼれる句となっています。即ち、意図せざる滑稽句であると言えます。

偶然できた滑稽句であるため、その数は極めて少ない。実際、数千句あると思われる掲載句の中から上記五句（私が、思わずほほ笑んだというだけですが）を選ぶのにえらく苦勞しました。（次号へ）